八代集抄

後拾遺雜 一之三

二十六

特別
イ 4
3163
104(26)

貴
14
3163
104(26)

後拾遺和歌集第十五

雜一

さいたちを　　菩滋為政朝臣

としふまはあれの今
をとろへてる家の殆
まさわらく誰とふ人
もなく成ぬくに月は
殆むりにかけてをす
めは心もくをとよめ
花も荒てる宿のす
きまのうちなる雨を
こゝるなるも

月かけ乃いるをおしむ
心は明し

我ひとりなりむとおもひし

としふまはあまの今まさる宿乃内に
こゝろなりくもすめる月の那

宇治忠信女（女イ）　諸陵公ナ階、資長女

月かけ乃いるをおしむもくるしきに
あらりは山のなりしかれ

藤原為時

我ひとりなりむとおもひし山里に

世は述懐をこそ山居
たゞ月をこそよめる
まや我一人とふるまを
て山居せりとこゝハ行ふ
事なるまゝ月もす
めりとこゝ

ゆゑれさおとしてうゑ
月のさすを舟さす
まうへて月より乗て
半もとらさるさ夜後
あるまや

月かけのかゝふく
月のあまかゝふくに
つけて池あるも無
なれて月をさそふ

おもふことなきこ月もすみなり
舟中月といふ心をよみ侍なる
源師賢朝臣

ゆゑれさおとしてうゑ（もイ）てこそ言流舟
月乃ひかりのさすりまの世なく
池上月を請る　良暹法師

月かけ乃かゝふくまゝに池あるを
かゝへあるとおもひなるか那
後冷泉院御時きさい乃宮にて月
をよみ侍なる　大蔵卿長房

かとおもふ心
月かけハやまのを出る
更行元ハ雲も風に心
も沈まされハ月も無ま
さる心ちするまや山房
長房卿秀房三首の一
首こ袋双紙にこゆ
たきてこの枕のちりや
連衣ハよをつゝねて
夜衣もいねと見あり
世ハ枕り塵もつとりん
こと月のさかりハ十四
夜より廿日比まてを
いふとかり
捕釈の六条の家　ゑ　鴨立

月かけハやまの乃を出るよいかりこと
かけゆゑそうてまきりなる
連衣着月（ニミル）（ヲ）といふ心をよみ侍なる
源頼家朝臣

たきてこ乃まくて乃ちりや津なるん
月乃さかりハいこうねるまね
月乃ひとなりなり侍なる夜まきて（月の面目）
ゆゑ（すこ）まもなき雖きすなとこゝまへてもち
より捕釈の六条乃家にまのれりなる
に夜更にたれハ人もなしとこゝ招

そこにお泊
家のつまに出ぬるく
そしつくるに捕親の
月を詠ぬし
同じ心にもなと懐園
の詩まるに捕親の
おきぬくるに月を
電にそるに同心とし
池の八ぬ田の川にや
秋の天をうつくしく
月のすゝしをれるを
電してよめりわ
かしと所かしとをとひ
やりて見侍るや音
の心にあきらかし

ゐる小住何しらる家乃つまに出
居くおなる池に月のうつりて侍
ゐるを詠めてみん侍ゐる同じ心にも
なといひくよし侍ゐる
懐園法師
池の八何田北川にやかよふらん
そしなる月乃そこに見ゆるを
中納言泰憲近江守にて侍ゐる時
三井ちにて哥合志侍ゐるに月を
よめる
永流法師

八川かくにゆくとも
電あれ八月のゆくす
見やまし春天に
月のゆくとハ見さる
さるし
八川よりもくとりなき夜
いつにすくれての電
にいる物なれと電なけ
まハ月の入所なきに
見る人も何かて入らさ
きるし
山乃端の明らかしかハ
池の八月の入とも
かくれとも山の端に明く
何かしかハよりかんとし

八川かくにゆくとも月乃見えねかな
こなひく雲のうしになけまハ
永承四年内裏哥合に月をよ
める
江侍従
八川よりもくとりなきに北月なれを
見る人さへかりいりかくさきに郷
麗景殿女御家乃哥合り
（レイケイテン）（昭子後三条院女御 北宗公女）
播河右大臣（北宗公 女御父君）
山乃端の明らかしかハ池の八
（イツるとも月ハかくれさらまし）
いれとも月ハかくれさりけり

いつとても月ハあれさ
らすしハ山の端の池乃
こゝろからの心や
やとこえにかゝる無
心明し
わきひとりうつせて
かわろハ大てさうる也
と云此月のかわり付
かゝさるゆへ子なる東
て後のチ詠るとの
也とそへし
賀陽院ハ高陽院と同し
拾芥云高陽院中御門
南堀川東　南小二町
南一町　後〈賀陽親王〉

題しらす　加賀左衛門
やとごとにかはらぬ物ハ山のはの
月まつ程れこゝろなりけり
依（ヨツテ）月客（カク）来（ル）といふ心をよめる
永源法師
わきひとりあのをせての子やたのまさま
こよひの月のおなしなりけりせそ
賀（高イ）陽院にかゝりける時みそ
勝地しをしく泉殿のちかき九
月十三夜ありけるになれハ

家三三こ栄花物語巻廿六云
高陽院殿のありさまを
面白くかうし南對を御の
清涼殿にして寢殿ハ南
殿ときてこゝん殿で
みいとかくてきこえ
山ハ深の奥山と見て池
こゝろき中よりわかち池の
かすて遣る池なわた
大の鍋殿のうこえてる
らすなりし　下略
岩まよりつうろうり
心明し水の音也けし
板中ほり子あれする霜
其ゝ板面よわすれも

後冷泉院御製
岩まよりなかるゝ水ハはやけれと
うつれる月のかけそのとけき
月乃夜中納言宗通のもとより
つかハしける　花山院御子
深山（ノ井）清仁（キヨヒト）親王
板中ほりて子あれする霜乃さひしきに
こゝろまなくぬ月を見るかな
こよひみてハなくて二三月なり
あかて帰れ降かゝるよそのとと
につかりける　中納言宗通

かなしき月の又心と
あかれハねやの板まも
心ともなくても月のうる
ハ嬉しきを面にハさう
こそ板屋も小さまひ
らんとし

月見てハ誰も心う
月ハ陰乃精なれハ
見る所に心も流れ物
悲しくなるす彼子
里にちゝ物こう悲
なれなりのあれ面
あり此歌ハ古今に
我心慰めかね川文
科やをとしすて山に

あかれハねや乃板まも小さ流れん
ぬす
こゝろ月ハらましかりしを
人乃こゝろとかりと夜の月ハいくと
いひたる遊ぶすりほかりしなる

菅原範永朝臣

月見てハ誰もこゝろうなくさまね
とこすてやまれ小さとなるねと
おかやけの流れこまりにて侍なる
比賀茂乃社りよるくまつりてい
のりゆくるに月なしろく侍

てる月をこそこの
心にてよめり
かくたかりくまるき
おかやけのうしこまり
もゆるされて心も晴
やりて見まりしとし
すみあるくみやこの
住別るり流と小
詞をうへくるまを聞
き心りうつてかく
すみなる夜の月をこ
てはかくまれこひ
しきうとし
こゝろともに山のそ
流れに出し月なれハ

かくたかりくまるき月をおもしくそ
なれハ

賀茂成助 神主成真子 お注

こゝろものすれたくみるよしをかな
くまより出侍なる人乃月れいと
おりかりなれハ鞍馬の山もかくこそハなと
出なるを呼て

秋院中務 秋院長友 お理女

すみなるくみやこれ月のさやなきに
あかりくるまの山ハこひしき

遊し

秋院中将 父母同上 大秋院女房

こゝろともに山のそ出し月なれそ

都はあかりもわ
すれもせし
みやこあかりもわすれやハせる

月乃おもく待たる夜小一条の左大臣
貞信公
まちわ手むかしをこふる心をも待
たるふよめる　清原元輔

伝ふれたる月ハ
心ハ明らかむかしの世ま
我乃字をミたる
し

伝ふれたる月ハかハりしぬるかな
あかしむかし乃よるとやこひん

月のまへにおもひをのべて心を
よミ侍る　藤原實綱朝臣

いつとてもかハらね
月ハ秋こそ小ろま
ふかねをこゝろま付
てもかはるむかしの
こひしきをも

いつとてもかハらぬ秋の月見れハ
たゞいにしへの空ぞこひしき

雲さ乃花人　六位花
人乃延爵ありまつり
て花人をおりるを
いふなるや
ほねおりしさやけき
叙爵まつ花人なり
ねハ殿上をおりてさと
乃地下となりける
事ハおかれこひしき也
の上下とし花人また
暴成せし時をこそれハ
懐旧の説のさき
法住寺　拾芥云法性寺東
太政大臣為光建立
とおくもにおりめ今

雲さ乃花人まて待たる時對月懐旧
といふこゝろを人々よミ侍りけり
源師光　義清男摂津守　信濃守正五位

ほねおりしもさやけき秋乃月をとて
おきれこひしき雲乃うへ哉

秋信民部卿乃むすめにすみわたり
侍るまかり乃女身まかりて後法住
寺といふ所にこもりゐて侍るまゝ
月を見て　民部卿長家

もろともにながめし人も我もなき

あつめし人は小の方と
我もなきとは今法
住なるにあてあるは
居なれはいと
月これは山のそこなく
かく月はとく出て
山のそこなく如しを
月出はむかへにえと
いひし人に見せやと
こゝろつけるや程西
白きまや
山乃そに入ぬる月の
世を捨て山に入まて
こゝろかさなれ一こゝろ人
とあらはいはうき世に

やとりはひとり月やすむらん
兼房朝臣月いてはむかへにえんとさ
のめてをもせさかなれはよみ侍
なる　江侍臣
月見れは山乃そこなくなりにけり
いてぞといひし人に見せそや（みイ）
おもふことをなる此山なる月を
見て讀侍なる源為善朝臣
山乃そに入ぬる月のわきならは
うきよ此中にはいてしを

出ましきに月は又
いつるなりとしかふ
るすをと云に心を進
山に住侍て　比叡
むかしにし月のみすも
知人もなく柳もことなる
れと月は山にもかはね
はわきとともに山を
出しまやとて
うち乃法柏忌に筑
禁事此法柏忌にはなる
しとめて知人まいらす
只侍臣をとれとぎよ
ことなるすをいふとし
女にかりわ　赤染の嫌

山にすみわつらひくなりにまかりて（東大寺）
住侍なるに却る人もなくしかし世の
すみにもにきかなれは月の西日く侍
なるを詠て讀る　聖楚法師　東大寺
むかしにし月乃かけにもにくるゝ
わきとともにやこ山をいつてしん（てけイ）
中関白少將に侍なる時うち乃法をの（為隆公）
いみなりことなるとて月のいつぬさき
まとゝ忘き出なれはほとめて女にかも
まてきしなる　赤染衛門

いまはとて人の云し
出るのちは中関白の
出まひしのちも狂人
しく月は入さりしに
ちも忘れてゆりまひし
るまゝと恨む心なるも
こゝろまも何ってうき世に
玄旨云此法遺例故法位
さらんと思召ほどの不さ
に法令もなるへき世なり
此禁中の月は斗遊く
思召れんとなるも此帝
は法位も絶不年にて乃
末をくもと思召へきを
なりぬさ世なりんの法心

いまはとて人乃ゆうきし月かけは
出るく乃のちもひさしくうれし
れいなるすかりまして位なとさらん
とおもしめしなる此月のあかつ望なる
を御覧しく 三条院御制衣 冷泉第二 法左位不年ミ
こゝろまも何ってうき世になるへき
遊しかるへき東宮乃月かな
後朱雀院御時月乃あかつ望なる
夜うへのおもしめしいかなるなりら
中させ給なん 陽明門院 三条院皇女 後朱雀院后

諫は法名称相しく思
召へきなにこそ言心を
よく思へて此事を見
るへしとて
いまはとて中ゐの月と
いかなる勅をゆへかくめ
くり逢へきなりも生る
れをとよませ事ハ知
りこけまと大かさ乃
風情哀なる事なや
なをさわ乃見るのめ
小式部のやうに笑事の
ゆなくとの心
このめすはましてぬる
我このめられはこそ

いまはとて中ゐの月をなのめ渡
めくり何ふへきなりもしられと
こんとひとくこさわなる人のことに
月のあかつ望なる夜ほかりしなる
小兵
なをさわ乃そこのめせて哀なも
まりかなりすいつる月かな
小式部
このめすはましてぬるよりかさねまし
これゆへかゝるあ望何けり月

おきて此月をこまへ
と面白き返事とも

これとくらゐれる
誰とも志ぬ人のうち
つけるものの心をこめてしも

月ありく侍ける夜ましとそよ女
とも乃立てく侍ける を男まつらんを
いひ遣させて侍ければよめる
よみひとしらず

これとくらゐまてこるやとしいひしの
月よりかゝ乃人をいるへき
ことひ必とこのめてる女のことに
月ありて望ける夜まのめて侍け
るにおりしこめて女逢侍さわられ
ハかつりて文の日清かりしける

よしたゞハまゝれぬ男
をきなりハ清をきて
ちとけ心と我ハさしをき
てかやう乃面白き月を
見すてねなるやさし
うね君らのこんすい
いてとし
なりむれハ月にふきね
よりひやうくうふき
て此世にいるかしかな
れとなりん己月の今方
に観しける心
いろ沢に 遍照なりも
寛朝侍臣のもと
山のそよかれなりてう

菅原隆方朝臣 但てる
侍中 隆光子

よしたゞハまゝれぬ男をハをきなりし
月見ぬきそかたうおしたれ
月乃山のそよいしんとするを見てく
よみ侍ける
僧正源光 大夫師 備公子 東大寺

なりむれハ月にふきねあそれまの
この世乃かともかそうわうし
侍臣乃あまひろ沢りことるとき
きてきしける菅原範永朝臣
山乃そよかれなそてう秋乃月

侍臣を月に比して
唐沢にことゝるを送

こゝろ世をこゝろにもやみまゝとそし
月をこゝろくよし侍る　おゝ君当社方母
中原氏國妻

こゝろともにおもしらき
西方ハ安楽世界法人の
ねのみ所也我も月を
同しらき世にすみなり
ねがひくも往生なる
きに月ハ滿山しとゝ
ね待の月　十九日月也
蜻蛉日記に和にかなひて
此頻に夜拈の由こゆ
いかにせん山乃そにこに
我をとこうとなり雪

こゝろ乃そしらりいてん月をそ
月乃勝なりなる夜入道拵設まう
てきてく拵給志侍るにこのとし
けるき事をいひ侍られハよめる
くゝるよれ月と我身れゆくすゑと
おかつかなさそいつまきまされ里
村上乃御時うへにのかりて侍るに
うへ御前のことゝりに侍れハ帰りなり
てよし侍る　秋文女御
かそれぬりなるにやめのうきねしく

入道拵設拵給をしてね待の月
乃出るれとにこよりぬつきすをいひ
こゝろにとまらんといひ侍られハ読
侍る　大納言君總母
いかにせん山乃そにこにとまらして

ね乃そてハ雅ゆくてや
むすよりと
ほかけや何しの池乃
阿羅布池西本勘序
哥さうきすなりや
くる人もすしといへん
こめるなり
六条兵院　禖子内親王
後朱雀院皇女ヲサイ
ハませと云をめてて
よりせのふ作ふ人こを親
を出し云合をしすと果
花物語卅七ひ何り
あらはれくうらみや
右に心よせのうを汀に
よせしとうてよめり

そてハ法きなくなるこころ郎
殺志しると　曾孫ぬ忠
ほかけや何しふ乃池のうきぬなを
うきことあきやくる人もなし
六条前兵院に哥合何しんとしくる
に右に心よせありときて小兵かとと
にはかりしくる　小式部
あらはれくうらみやせかし隠ぬの
こきそうりよせし波乃こころを
かへし　小兵

きしとをくしてよふ
右とも左ともよるる
なき歌をせすり右
に心よせすとハせすす
なるうしみやとの心
六条お兵院に物語合
栄花物語卅七禖子内親
王乃作りを云に物語
合とてこ彰く作て
左右ゆこかて廿人合せ
なとせさせ給ふ
ひきすつる岩かき沼
方乃人こ乃小兵か物
語をとめしるを引
すつるとよめりけふ

きしとをくしてよふ波ハ中うしうり
よるりしもなきなけきをすせし
五月五日六条お兵院に物語合を侍
くるふ小兵をそく出ととて所この人
人とめて小兵か物語をとめて
はき乃物語を出し侍られハ
宇治乃お太政大臣の小兵か物語ハ見
所やすしんとてこと物しかをとゝめ
て侍られハいそ所きぬなとしに物語
をいしまとくよみ侍らる
ひきすつる岩かきぬなれ何やめ

乃端午の物語合に
ありんともしいさかりに
大段大臣の御詠にて
多きまゝ
たゝきき乃国伯耆也

おもひ出しくとしたゝかにあふかな
たゝき乃国に侍るたゝかく乃寿侍
らさかれハこゝかりにつけてくたり
りしかる　　るの内侍

ゆかりにこそ侍りてもゆかりにこそ侍りて
帝本ハ伯耆をうへて
いつ方奥儀抄云上なのく
出さ原ふせやと云不ハ
帝のやうなる木の楯の
かうあてハこゆるぎの木乃
平へ行ぬれバ心ぎの木
とも見てざる也こゝ事業
されハ此事もゆかりにう
あかりても侍りけり詠也

ゆかりにこそ侍りてもゆかりにこそ侍りて
侍りとゆかりハをとゝ侍りし
わつらふ人乃名命をよひ侍るなる
まかりて又の自いかくとゝふひにを
しさかりなる通りて
よみ人しらす

たゝかりハ明と彼れのり
やふせやまする帝本の
そとハこゝくなりね君
小を本哥まてし
おもひ出てとふこの禁
とハぬつさに令想と
しくまかりなハかふ
かくとひ出くとひかふ
こゝかを詠ゑてこゝる
つきつくきのふかを
せさかりまゝ
やまさとにうねて
一しひとひくしのめ
させて又をとせねハかへ
ひとくつきとひそふ

おもひ出くとふことのたを誰見ほし
はらきさりしへぬいのちなりせさし
わつらひくし山里に侍るる此人乃とひ
て侍られと又をともせとなりに
かれハ　　中務典侍

やまけとをこうねくとふとしたしハ
はらきこころを見するなりかわ
むまれあいしかるとにはかりし
かる　　兵部女御

ゆめ乃ことおかめかれゆく世の中にを

うへてよみてく掉をも能ほ何へさるんと云
ようへて操（ミサヲ）もさのこ
え能るかしきも能
志りし心みさをなり
てみさをなるさま
するを操能ると云
わりなしや心なかなふ
間ハ紙心のかゝる
物なり勇れうき時
ハ自由にと思ふねよ
まして枯こなる人をと
とめよといふハわりな
しいかて留ゆんとも
わするなよ思るも

定浦鈴臣かまくまなりてかゝ
心なとをなれハ時くひきとゝめよ
といふ人侍なれハ　源雅通朝臣女
わりなしや心なかなふなみさ多なよ
身乃うきときハとまりやハなる
くまのへまいるとて人のことに
いひつかはる　道命法師
わとるなよ思るときハ三熊野の
うしろ田ゆふうしろ千かさねん
ふりんとしのめくる人のさもあ

ふくまれしうしの涙
ゆふをしえなるとよ
みく涙ま綿といふ
草ひくえも切さなれる
物なれハ腹なんとも
わとれしといひつる
三れんといひし三まし
き物をと乃心
物いはくく人乃心を
いはれくとふハ志実
なれも知らしいれ
とりんこう深なる分れ
ハと心見ま物もいへて
何るかよやかしまま
まとはれとしてやみね

ら思ひしきなまとれハよみ侍なる
わとれしといひ法る中ハまれなり
ますまんとこそいふへかりなれ
ひさしくをと法まぬ人乃ことに
物いはくく人乃こころをみるなとに
やかてとはれぞくやみぬへきかる
七十代
後冷泉院（法暦四年四月十九日崩）うせさをまひらく世乃
うき事なとしひみてはくこそりね
て侍なるに（七十一代）後三条院（法暦四年四月十九日受禅）位にはかせ給
くのち七月七日にまいるへきよし

つかはしきよりハ
とくいまゐ抽をとの
心をしらせたりそも皆
ゐ食うしき
御中の御おもしろかれ
は冷泉は三条法兄
才まては朱雀院乃
皇子なれハおもし流れ
とよめり帝の御とす
なれハ御中の御とも
同し帝とせひなり我
二君は仕人を掲うき心
こ乃ころの御事の
小の宮の御は何人か
寝ましたんとの心を

御事の御はれハ清る周防内侍
御中の御おもしなれときこなりし
わたしんこと乃なをうかなしき
源敦光朝臣女をとれ侍ける比霜
乃をきしたる御しきはかりしける
小大君
こ乃ころの御事の御ねさめハ御ひやる
いかなるをしか霜ちしふしん
大刻國章書なくなりて秋風の
御さむなるよりしまわに付ていひ

霜の御事に添て
よめるなるへし夫婦
を霜巻ようこれ心
おりひきや秋のよ風
此ふかなまハさひの心
しるかと國章に
いひかけし心なるや
秋風乃男ふをとれハ
法まもなき人をうしふ
霜るおもしに男ふ
をとく秋のよ風吹
らよ小りふ人の多
まんてて
いかなれハ花の白ひも
小霜をとるとも

とこせく侍ける西ちりはか
ちしける
清原元輔
おりひきや秋乃御風の御さむなきは
いもなきとてりひとりねんとそ
春比小霜長紀をとおひともに哥
よみ侍ける小ちしをハ忘るをと
いひわたりて後為敦朝臣男ゆう
里て又此年の事なかくうかをとは
はかりしける
中務卿具平親王
いかなれハ花乃白ひもかくらねと

ひしまゝ乃ふ事なく
なりて遠しきといふ
まいとよみまする優
り衣かく侍るや
かうかりなりけて
脯親の叙爵せな
おへし

すまみしまゝ乃こひしかるらん
能宣男まりかくのち四十九日の
中よかうかりなりけく侍るに大江
匡衡かきとよりこまりしいひをこせ
て侍る返るまいひ法かたし
なる
桑主脯親 能宣子

すみそめにけけの衣
服衣より赤衣をか
さねしかハ然親と
表親との間をこ
すとなるへし

すみそめにけけ乃衣をかさねきて
なれ乃いろのかへなるかな
陰奥りまのかり下里なるに信史
乃那といふ所にはやうへ人を君

なれハその人なくなりけりと
きて
能因法師

ゆきちりしあれる
むりしし人をこい
思ふとうつく信史
那乃心をまめり

ゆきちりしあれる君ハむりしし
人を志のふれわるなりけり
母りをそれ侍く又乃年れわさ
なとるこく法まくに侍るに多
まちまつとりしることなとをし
のこひくひくとハなけまと今ハ
れとなとるまとれハわこなし
けるをなきなりける人のあひ往

又乃年れわさ
一用忌なるへし

琴乃ねまけハ拾う
此方上句を畧せる物
なるべし
あき人ハをとられしせ
心ハおそ乃青信のを
そしに付く一人母
事をとつるよりあき人ハ
青もせてとつるなるも
喪ある時琴乃絃
を断るすれ一月是
をとるし比なれそ
かくよめるなるも
源經隆 権中納言通方子
前常陸み四位
志くるれとかひなかわ

なるかくより琴のねまけハ拾う
なるきなといひをこせて付なる
あるす小読る 大納言道綱朝臣（イ母）
あき人ハをとられしせてことのを
さちし月日うかつりきまなる
ちにをくれて付なる此兄弟のる
りさりハとふひ乃人こまてさられ
と我りさりハをとられる人も付
さわられハ 源經隆朝臣
志くるれとかひなかわ埋木を

埋木ハ時あるれとかひ
なかわかれとも花聖世
方をう人もとふよ我か
ことき埋木ハ同時ある
比もとふ人なりとの心
人志れをおつるなそ
心ハ朋を
故中宮 姫子 敦康親王
乃居むとめ 祐子内親王
六条母院 禄子なりの元
母也 お注 此中宮宮法関
白 教通公乃居 書子也
こそ乃ふ別し星も

いろはくかくうひともとひなる
拾ひなる比時あるくかり付なる
何さこ我乃時雨ハなと人乃青つれ
て付なれハ読る お将井尼 長和比人ニ
人志をとおつるなそ乃をとをせそ
あま乃志くれりをとらはるまし
故中宮うせのひとの又乃年の七月
七月宮法 教通公也 お太政大臣乃ことにはかハ
しなる 後朱雀院御製
こそ乃ふ別し星も何ひぬめり

心は明し此御うた業を
掃除世四りはわかる事よ
なし世をよしとてれ
秋くれは流れまされと
てほ新しかれてぬ今
然しきと直ほ家御の事
位殿まいて世をする所を
其家にも見せさせをする
故此御返しなとをしを
掃除にはかくしたるや
たかるさにようつてこれは
かゝる折は花も心あるまき
ものをなしの心なるも彼
と年かわりは墨染にさ
けとよかる心をとしてや

なとしくひなきわかる男なるらん
後朱雀院うせなひてうちはらき世
乃たかなき事とも侍なる比花面白
く侍なれは　小左近　散位中原經相女
たかなさりようつてくれはさくら花
なしぬるやなんとすらん
故皇太后宮うせ給て明る年この
家乃様の花面白く咲たりなるに
人々いと口なくなといひなれは
兵乳母　お加賀守殿時女　陽明門院御乳母

かくとしとおもひて花をしたりしかれも
まして皇后乃御殿見
とおもふ花にはいふ
風のいとりきとも
かすなくぬ男れうきこと
心は明なるも
たかもいかして
秋宮女御　村上乃御
子親子内親王いとうと
まつりこ御嫁姫乃
かとのるまなるも

かくとしとおもひて花をしたりしかれも
風をいとはぬ事はなりかき
世中たかなくて太大將通房かくれ侍り
然ときて　小兵
かすなくぬ男れうきことは世乃中れ
なきうちりしにいらぬなりかり
たかもいかして里にまかりいて侍り
なるに十月はかりにおかくなりて
内より御とかくひまとなる御返す
にまはりなる　兵官女御

かまとそつるのさちかう
御産乃ほとを心と
とすく心をすく宮
ほとの再ならせ
上東門院白河に流り
御門乃法歌よりて
也 栄花物語卅六云世院
乃法歌に八世の中を宮
歌信させて叢(イヲ)の中
求めさせ給て白河殿に
わすせまひぬと
いかしへをこふるねさめや
心に明し栄花物語卅六
云白河殿の秋乃氣をも
そうし歌なるにまして神之月の時雨に木葉の長雨に徑ハ泪止めてうしこ扨此寄

かまとそつるのさちかう 乃霜よりも
けぬへきほとを 卯のとうより
六十九代一条院皇子御母上東門院
後朱雀院うせさせまひて上東門院
白河にわたり給て嵐乃いたく
吹ふるほとめてか乃院に侍ふる
栄花物語三八とのこゝろ乃侍ふのことにあり
侍ふ内侍乃ことにほかつ寄る
栄花物語二大膳大夫ことと
菅原範永朝臣
いかしへをこふるねさめやまさるらん
まてもなるそぬ今ね乃ほとに

入道摂政 兼家公此
比京に助まや柏木の
木ゆきわたりなと
かけろふの日記にあ
蓋りいなとしひをこせ
蜻蛉日記云又程へて
見て息る程あると
降る日書にこんなと
やまとくんとて此方を
りしきの森乃下草
れしまたにあるとと
云世諺にや此あれ
ある如く夜拈れ成
と此此書を此めらと
之柏木森也兼家公
の当夜を深て歌へし

後拾遺和歌集第十六
雜二
入道摂政夜かれ君に成侍ふる此
蓋りいなとしひをこせて侍ふれハ
いひはかりなる 大納言道綱母
かしたきの森の上に草蓋ことに
あるをしのめとやしをるをかるく
こんといひてこさりなる人乃
蓋にハかなしすといひ侍ふる
あるまとり 馬内侍

出詞の歌ニ見乃
くしきをもよめり
そのいろ乃葉とも
葉に何ふと云詞の歌
ある葉なりこと葉
とも見えて枯しといひ
て枯くなる事をよめ
りとされハ葉といひて
かくつきるほといひく
ゝ云かけんなとも陰生
乃日葉起る故也
かたくなりさしも思ひて
さしも望りくとハさ
やうの天の事なりと
思ひてとしもいかなる

ハむすめまかれりとくよりし侍
ゝる　小馬命婦 おほのかみ女の 棟世の女
そのいろ乃葉とも見えてをかまふしを
いかまいひくかゝふハかくへき
男乃歌ゆけくまうてきく侍る
まねしかときて頃りゝれハほとめて
かくなんなりと男乃いひをこせて侍
ゝる返るよ　和泉式部
かりくなりさしもなりたぐ　笛行乃
をとをうせまし歌ゆけよりとも

君のきしと思ひて来文
くねしかとも稱ひを
と書をすべき物をとの
心を笛行乃歌にて清し
やすらはてしてまゝそ
まぬ夜さへ宵なりハ
狂行やすらはてハ只
ましてうき橋の戸を
まても宵のまたに
かゝる人もをかれと
人忘れをねしさもねしと
古今遠くハ下にを
忘ハ紫乃根摺の衣
ゝまゝ出るゆめそを
本哥まして紙をとよ

よひ乃れとまうてきたりゝる男乃
とくかりりゝれハ
やすらはてしてまゝそ 河ヨイ
さしもおもはぬ人もおもはゝり
小式部内侍のをとゝ二条太政 教通公也
大臣 教宗公 ゝ
はかりしゝる　播河太大臣 教宗公 御堂臣子
人忘れをねしさもねしとしさきの
ねしとり乃ころもうをきふ小をせん ヤイ もイ
あし　いつしきまふ

あふさかの世さゝよ心六
猫あくてともへく
かし事よ托意
するうゝハあるねと
さすゝまよからもよ
下かし東猫ハ托意
れぬ心なるへし
待こゝる事人よいへる
あの人を知りける
すゝと人乃名を立
まとひてる也

ともに終宵よ下りて盃にゐるすて
猶ゐる比与りまちよられいと女をゐく
くるともなくて住りける

相模

あふさかの世さゝ心もかよいねと
そしかつまちハあかそすこひしき

左大将（忠義公子）鎮光のあひ待ける女よはる
ある事人よいひけるあれといひ侍か
それハ女の読るよみ人出てしりて
ねぬあそ乃猫ぬ名ハいうく立ぬれハ

ねぬなハ乃猫ねな六
猫もせぬなきゝ名六立
ぬれハ世よせられきさ忠
ちかさとこねぬをも
大沢皆枕海の狭也
藤原兼平朝臣母
真翁太政大臣乃御子
三品宮内卿兼平乃母也
すむ人乃かれゆく宿ハ
秋枯かに枯る物か
れと今ハ四月に住
人乃枯る宿ハ花に
枯を見すると
行さ乃ゝね
別を告る鐘を恨

なをおほさるゝこのはしやより
太政大臣かれくに成て四月にかへ
まゆ乃ことわちをかへてよみ
侍ける

藤原兼平朝臣母

すむ人乃かれゆく宿ハ時わかす
草木も秋乃いろにけりける

女乃もとをいふ行のつまりてよ
きて

小一条院

行さ乃ゝねも見つゝゆかれ
これをいまあひと思まし六

あまりてそも入おの
逢瀬をゑく嬉と
さりて嬉りしんなと

いけくかの来ても
心乃隈ハかれたる西
をいつり人家の隔て
たる掛れ隠れある
るまつてと隠なる
くかたりんといひし
とうけていつ小隠れ
なりん心を隔てたる
曲なけまハとこ
やすらひはまきの戸

男乃隔つるまをしらくかたりんなと
いひ契りていくなりしんんひるまは
まハかれをしけへくなといひて待
なれハ　和泉式部

いけくかのまくもかれんへそてつる
こころ乃くまのなりそこそあらめ
こんといひてこそ小おりしなる男の
をとりけりしなる

やすらひはまきの戸をこそけさらめ
いかはけぬる冬乃夜なりん

さりともこんと待やも
らひとく志本の戸をこ
そうけをきつるり
冬の夜ハいそかく只
まぬるなりんとこ宅天
長夜は待ありしたる
かひなき歎きなるも

坊なかりし　春宮まて
おしくなるまし

あをやき乃糸は
夜まる人ハ押なれ
と柳ありしなきなを
とりしとこよるくるハ
糸乃孫陰と
皇后宮子この三や此文

七十一

後三条院坊におりしましなる時女
房乃局のおは柳乃枝をうつて待
なるを雪かり掛渡なとして詠めたる
何とこそ柳なのりなれハよへの人乃
とりしるかとこくこひはをこせたり
なれも　菅原朋綱　朝臣　条浅兼經子　お讃岐守

あをやき乃糸はなきなり立はなる
よるくる人ハわきなるねとも
皇后宮子こ乃三や此女御とゆえ
なる時里へまりの出給はなれハそは

の女法　後三条院乃
御時贈皇后茂子
後信心女實ハ公成
女白河院延久元年
四月廿八日ニ十七歳ニ
て春宮ニ立ヨ事ニ
御母茂子を春宮
乃女法とや世しと
ましこさりぬまりきの
菊の花がこまなるを
うつろふとしハまし
さりぬ菊も何るに女
法ハ里亭にうつり
ふふハいくとも
むくけ身ハよろく

とめらく（あくる節也）咲ぬ菊にさしらく御世う
そこをくるふ　後三条院御製
ましこさりぬまりきの菊も何る物を
いかなるやとりうつろひぬらん
わとれしといひ侍る人乃かれく
ふなりそくまくらそこと力ふをこせ
て侍るに　馬内侍
むくけ身ハよろくになりぬとも
ふるりちきりしことなわすれそ
物へまりるとて人のことにいひ

むくけハ鞍のうまと
身ふるりそ子こそ縁
流し心ハ明るや
いつくとゆくとハりハ
心ハ明し定めてとふ
人も何るまし人れハ
乃方をいつくとも
告やらぬとの心と
かくハりハ志のふる面を
心ハ明し　イかハりハも
かれとかとりふ心かく
たりもおなし思
小中を思ふる面と
うつてよめるし
そらにある人乃心ハ

とき侍る　和泉式部
いつくとふゆくとハりハ法けくほし
ふへき人乃何る身とおもひ
思ひしる男面乃ふる夜ハそぞきく
ぬれしるよしゆりていひをこせて侍れハ
かくハりハ（イかりハ）志のふる面を人とそく
ふふくぬまてくる袖とりふらん
人乃ことにくやる男を恨しやり
て侍る返るにはかりひ侍れハ
そらにある人の心ハ（エイ）さてうに乃

函谷関乃ことゝかや

史記列傳七十五云孟嘗君至関関法雞鳴而出客孟嘗君恐追至客之居下坐者有能為雞鳴而雞盡鳴遂發傳出上下畧孟嘗君の名乃ねをいつりて函谷関を出ことゝかや侍らん計畧かやと

そしハ逢坂乃せきの侍

みやこいつきれ心こそ

我をとめてとりけれ

書言云いるるハいるいるも逢坂乃関ハゆるさしハ

我をとめてくるゝ名乃うらねハたゆるとも

世をうけ函さうの世きハゆるさし

三漏乃社をうけ侍る人を得

ぬる人をかりて素意法師

逢坂をゆるさしと也

よふかゝ函さうのとりのこゑ

とり鳴ハ助字也師説

云我ゆるさゝ侍れ者

をあつせてこゝにゆるさし

とも此逢坂ハ函谷乃

こゝにハゆるさしと也

彼行成乃我係に侍

るを陳ゝく名の

函に侍されてと侍

のゆふとさやの侍

えうれてハ逢しとの心

ゆるさしのこゝろの歌

心ハ明し

何つまち乃うのけり

ゆるさと乃三月に山逢を得れと

拝る月乃かけ[illegible]もあし

たらかゝあとにいたんとゆふ人の無ひて

こんとひゝるかゝりことゝり

侍りけ

何つまち乃うれたらかゝはまちもも

ゆふさりまくハこさしとうおもふ

後綱朝臣へひくゝ久はけりしれと

逢ること也せさわらるを我なといひ

侍れハ拝乃侍ハかまそ法ゝ

道乃源信濃し歌見
君といひける通
ちらさしとさ不[illegible]物
花を何もさけて
契を何みつると云
て世ま去る事と
むかしわ不みるか乃
頃をも何らしと
さらてさ不宮古ちかへ
さらてさ不へらる[illegible]
思ふ心世ま是れと
いひさつるとまて
とはさるなとし
能通親王 但馬宮
皇太后宮大夫永収男

ちらる　　　岩清姫君
ちらさしとさ不ゆか不さてらる
こその契をさへ何を清るか
むつましくも我き男よ宿ると
みる皆も男乃もとの春も
立ぬいまはちとけね[illegible]し
ひらく待るれい下野 下野寺源頼隆女 太皇太后宮女房
さらてさ不宮古ちかへる枕を
これとけあれるを世あれぬ
能通 イ宣 胡臣女をいひけて不ふ

いのかんとい遊はそ
初世らく道もの遊
乃さひしさあくいまれ
こ遊なそてかきつらく
みあくんすいと宮本ふ
まさらひ遊なれい
あふとはふ名何きよ
よしてまとを不いあふ
よしきとのして
園韓神乃御代内侍よ
為事根源云此二神ハ宮
内省子おしまうさし延暦

こそわてあくんすんといのか待るか宿
よし乃遊をみらく女乃めのとよ如く
あんゑてるとひひきて待るれとか
く読てきける 四条宰相 四条中宮女房
いのかんといい遊はまくかきわてよ
さてもゆふてふ名をうちしられ
資良朝臣義人よて待るる時
園韓神乃まつり乃内侍よ催せ
とてみるきすれとも世の神を
去るあかれい園うる神よつるん

遷都乃時造宮せらく
他所よ移しまゐらせるよ
只山所よ去らて帝をまつわ
まうんと託宣ありき延喜
式ゟ園神一座韓神一座
とのせられ礼ハ年よ
二度二月と十一月と之上
ノ丑内侍むかふ下暑江
次第五云二月ノ用春日祭
後丑十一月用新嘗會
前丑ニ内侍奉幣余
参進云々
ちかきまもりまきらぬ
のかれ且果雲の雅よ也
わすらるゝもつらしくも

とのゐしく待たるゝ夜てりによめる

少将内侍　藤原信実女 白河院女房

ちかきまもりまきらぬ子らのまきとはりるの
のかれ神よおくいとをくいのしん

家綱朝臣又なよりし待たるらり
おそねさまにしくふ加られい

はりける　伊賀少将　右近

わすらるゝもつらしくも待まねねいの
ねさくとおりふことしまられい

左衛門尉又はりけるまうと

ねぬるハ乃ハ根とうけて
ねまてこえんさわ菩
くもうそと云狐狩る也
よる逢ぬ月とうれハ狐
こあるも露ふ寂と之
あるもされぬ子らの
朔されねと風乃せわ
しき心よこえを我物
こ尻のうき恋をうて
也朔のこと人とハ和歌乃
打扇さに寄贈立
よる神のぬれよにし侶
馬系呂山塚ニありや志
なさり侃ることふ之と
おひろとかりとの

くの子待たれいちはさきらかはかり
てはべりける　少将藤原義孝

あかされぬ子らのうれとせわかなりけ
よひおりつきとしの露けき

人乃むすめかおさかる待たるを行と
あひくるに契ありけるをとこもきかぬ
といひあれもとゆてまかりける人の扇
に書付侍ける　左大将朝光

おもひ河をよかりとしのめかひらく
波くをとくしときくかなとる

生立を待と契しと
いふに松をうつて来松
乃波こすりをよみ
て契の遠ふるをと
のめし心なるや
いつしかとまちしかひ
契し秋をいつかくと
待ほしかひなく幸
世無なけきなり
君はまゝこ志しさわ
廿日をたつかなると
いふ事ふくや

秋をまくといふ女に法かけし
なる　源道厥
いつしかとまちしかひなし（くイ）秋かせに
うよりとたりかも萩乃をと世無
男乃文法（かよイ）かけしなるに此二十日の
秋をみとらのめなるをまちとを
といひ待なれは　和泉式部
君はまゝこ志しさわなり秋のよ
こ乃まれ月はそ川かにうつるる
中納言定頼するのわてまうて

きもこうは心ぐらへに
しかひ乃主地を立
れを心ぐらへといふ
さこう心ぐらへにまけ
をこ主地をこそ論
里まもめさすのに
さいかり弱を見めて
ゆりなりくものを
ととの心なるや
をの法ぐら我り三て

きしわなるに門をあけよといひ待
なるをとりくいひくなけ待しさわ
なれはかつかなる又乃日はかけし
ける　相模
さもこうは心ぐらへにまけさらぬ
をやしをみてし弱乃あしかな
掲ひかけし人乃をとせをとう
らみなれは　中原長國
をの法ぐらわり三てしまるわになわ
ひとれこそを心みしまかり

我をとせにハうる
さらかしに落ちしかふ
りと識る君に如く
恨しられハ我に言
に自我と如しとこ
わ連さへ人を　寄し
まことハ我さへうこと
まつるとるさの心なや

うしチにハいそら
心ハおきしか也
楊則長父　陸奥守
則光之尼は山集乃
光胡法師母の哥の
ことそうきかり

法しかりかるわしハを恨むとこく
青志待らさりかれハわしハ乃をと
よりわ連さへ人をといひをこせ
待かれそ　律師鶴範　平楝仲子

うしチにハいそら人にとれかし
夏のまもうましき楊にうるくかる
楊則長父乃チちの玉乃当にて
待かる比るに則光之のりてまのわるけ
るを見待く男ハさしも志らさり
かれハ又乃自法かりしかる

法なくさくなれ
おつち乃狗　牧の名れ
定八宮抄にて我をとよ
らてるしをはなさ
てなれそてかしとよめ
れなるや

こと乃葉にはけても
わか蓬乃宿も分す
さひしき気なるを
末葉乃ちるに付
てもふひ出く羽乃
青つまも何るべきと
とその御なるや

やへふき乃陳るに
陳なき故とハぬう

さかチ
法なくさくなれそてかしチちの乃
おつち乃こまをきの心見しか那
末葉乃いてくちまかる日人乃許
にさしをかせかる

こと乃葉にはけてくしをとり向さん
かもまれやともわかぬ何しかを
西し　中納言宗教

やへふき乃陳るに何しハ芦乃屋に
をとせぬ風ハあしとを志れ

隠あるハ回しと志
まほいかくしと乃
宮も和泉式部ら
関こちまけ車声
乃やて奈きと同こ
わすそしや為ハ九重
九重ハ禁中之異名
殿に侍る人ゟれを
叩くよめり九重り
對してさへとハ今乃
そりし人を実方の
思へりそり

三条太政大臣（忠義公）家に侍りける女房
香殿ありけるにてかの人とさま文
に書すとうし侍りけれハ
藤原実方朝臣
わすれもあしや月たてのへ乃内あかる
こへとる人乃と（ゆ）うむへしやそ
高階成棟（ムネ）小一条院乃御供に
難波にまいるとていうにおくりけん
すんといいとこせて侍りけれハ
中宮内侍

志りしこうおもひも
去柄ハ乃子なる命乃
をうてくいまうさ
もおもハめ乃栗まれ
巨小んとし難波まる
あきし乃橋さそよ
めてれ申して下まや
これもさハ何かり
色れとの讃いそ然
きと恨むるハおかわ
乃すなわこの事
なかうけて中結ん
そのことい可んとさ
民陽芸則を編述
こゝろえ川あるれ

志りしこうおもひも出ぬ佐のふみれ
あるくへゆくをいまわすれなん
人のえくあきさまされたことはで
恨みたる人に　上総大輔
これもわれ何かりほのねれ
あやこをはくるそしめあるらん
小一条院切れてよなかあかりける
時よめる　土御門（ミクシゲドノ）殿
こゝろえ川あるれて打ハつく
くるをくるしとおもふあるへし

蜑拷縄海人のさ
くりをくなりけれ
ての花詞をくるもそ
孫なるも心は唯と
うしとみしかり
浦親は孫くなるまま
うしは入まさりられ
いうきへにまかさると
いふるのに牛をいひ
けていひをこすと
かすなるぬ人を
野飼に通るるを
うへて之粒なるぬ人
をのかれそなるつ心に
そ孫くをうしとも

日比うしをうしなひとく来め頼ひ
なるれとに孫くに成になる女の
家に此年入らく侍なれは女のことと
よわひかせくうしとみし心に
まさりなりといひをこせて侍わ
なる返るに 祭主浦親
かすなるぬ人をのかひ乃心りそ
うしとも掬そおりそさるなん
人乃ほかねを思ひくしてき
なるにしうことといひ侍なれそ

おりそされとも
いうなるく人はおほさ
童蒙抄なのりう
とは神馬草をいふ
日本紀十三濱藻を
なのりそもといふこと
祇別るとはこゝに通
別る人は多しと
きくを誰かな系
をかりて差んうと
也誰うといひしに
差ての多く
とへとしもなりはぬ
とへとしもといふり
十重を添て之心唯

よみ侍なる 大武成章
いうなるく人はおほさに吟ゆるを
とうなのりそとかりくこゝん
久しうをとせぬ人乃山吹に
さして日比乃法にはゆるせといひ
て侍なれは 和泉式部
とへとしもおりはぬや一乃山吹を
ゆるすといふくおりにこんとや
おなし人乃掬まわきてわとき
きておなし花につけてきしなる

あちきなくさひこう
徒然とうく独居さ
まつとさひやかてこの
山吹をまつらするうちさ
まハさまてもさひまふ
ましきをかくさふすす
乃あちきなさとも
神の此所まさへとも
さハぬとひ故示かく
歴めし宮も
ねぬなれ乃くるしき
あまハかなひて我まハ殆
あふを志して炊ひの君
しきりのさくしと
おもひしるまとし

あちきなくさひこうやれつまくと
ひとりやぬく乃やまふき乃花
わつふといひくへ志うをとせぬ
おとこ乃おかまハあるとくと叩て
法かりしける　小将内侍
ねぬなれ乃くるしきそのこまかと
さゆるを志しておもひしるかな
師資朝臣の掲いひわたりしるを
こしじ[illegible]ちきなくて後又こしく
年比まなりまれハかなりしける文を

ゆすふをなりれて
なれてくさハおけ
て乃心をいふ乃強そ
よめるし中いふハ兼
いふ夫婦乃中まう
てし心ハ明し
長しとておけすやハ
こしひ志りまし世さ
ことて何けすなれ
をかねをいふ志りまて
りしとし待せて速く
明るを私の私れもき
まうへ志りしとゆふす
をとハかりと以ハ素木
の戸ハかりとうへて

かへしとくそのもしまかきつけて
法かりしける　式部令姫
ゆしとふをなれてくほまれけん
こしけるこのを中川乃名
門をうくほくとくゆりまける人の
こをふきしける　和泉式部
長しとて何けとやハ[あるイ]をむ私のよハ
まくりしまきさ乃どいかわをこそ
内より出てかなりす法んなと契り
なる人乃をともせて里に出まけ

所まれたらけるまま
月ハ下界りをくわたる物をれとそれ
とは出るハ人は出る
彼は見ハ出て世す
里は出すゆよと之

きはつかけ名る菅原道信朝臣

所まれたらけるまま
いつるハ人ハ出てまこうすれ
彼出て

藤原元真

うきるすもまた出て
世はうきといふすも
出てさりしはかやなる
とやほゝきとハいふん
この心をまた出て心の
かゝるをとうへて之

うきるすもまた出て心乃山れたる
かゝるやほゝきこころなるらん

秋宮女御

ゆくかせはなひくおきち
浅茅乃風はなひきて
秋を出てするやは我おりさぬ乃徒我なるまて人の心れ秋を知るとこ

ゆくかせはなひくおきち
ひと乃こころ乃秋を出てする

後拾遺和歌集第十七

雜三

備中寺棟利男まりわ
往せるまてくのち
うせてるこちかりわ乃
備中寺をもとめる
ちるへし

備中寺棟利男まりわ
を人こ与子侍と呼て内なりける人
のことはほかりしける

清原元輔

これか又年へぬる男
我こそ年へて与こ
中せしは誰か又也
こしく備中をや
するんとの心なり古
備中山ハ備中之和名
云備中キヒノミチノナカノクニ

これか又年へぬる男をゆりすてて
きぬ乃中山こえんとすらん
ね中は侍ける比はかさめしを
こいやりて

源重之

たることにわすれ
埋木ハすゝに三られ
て花も咲ぬと男に
比しく おかやけの花め
くすにあつらぬ男を
よう乃景花をさひや
里郡立しき雪の色

たることにわすれ埋木ハ
花乃みやこをおもひこうやれ
法りさめしにこれらくの年此秋
うへ乃おのことも大井にまのりて無
のわ侍るまよめる

大江匡衡朝臣

河舟にのりて心乃ゆくときを
心明なるへし

河舟にのりて心乃ゆくときを
志行める男ともおもひしぬかる
大納言公任宰相になり侍らさり
ける比よすゝく法りたしける

世のやをきくり
川ハ我同名出ると
おもへハ世のうすを吹
まつけて袖をぬらせハ
よそれ抱うとて公任
をとふらふ心なるや
いさつらになりぬる人の
昇進せくいさつら
に朽果るこそひ乃
みも侍らはと我さく
ひなき沈海の身と
を歎きゝ上る心なる
へし
なつきのふ　名簿とて
我姓名　男なと出て

大江為基

世乃中をきくにまもと乃ぬるに
なみたハよう乃をのりうをなる
法りさめし侍るまゝ久にうへく
侍なる

菅原國行　内近乃有親子　諸陵乃

いさ法りなりぬる人乃又も侍らを
伊ひおりせくうねをハなのまし
小一条右大将にあつきまゝとくよ
みくうへく侍なる

源重之

ゆる國々それ〳〵あるを
いふなり
みちのくのゆくらの
一二ゐハひくやとそと
いそん枕頭と我を御
顯頂（ヒイキ）よりやゆんとそと
よゐはりまつり　禁中
乃二間より御居の僧
とく　長伝（ヨル）せらるゝ
事なり　源氏物語をも
雲乃うへまひかれ
後朱雀院のゝち後冷泉
院乃御時侍る也　夕日入
て月を見る心なり
蔵人まて明かり

みちのくの乃ゆくらの志ちひくやとて
きみより我身をまゐせ給る那
後朱雀院乃御時としころよゐ
御ふまつりなるに後冷泉院位に
ほりせまひくゝ又よゐりまつりて
のち上東門院にまゐり侍る
山　大僧正　文章生後宗子
天台座主明快
雲乃うへまひかれしゆふへより
いくよとりふり月を見ほしん
蔵人まて明かりまつりなる日

巡爵乃ゆ　おこ注
かきりあれハおゆの羽衣
童蒙抄云殿上人をハ天
人にたとふれハ雲衣を天
羽衣といふハ雲衣の探（カヘシ）
ハ禁中ニ六位蔵人又位
のゝち地下におゐれハよ
ろこひハ志なり狂殿上
をとらふ心をよめるゝ
うまして　ふことハ
よろこひいそんハなて
のまゐれハいそて宗
かとよ今まて長
せしとゝ

よめる　源經任（ノツネタウ）　本文以政職子
かきりあまハあまれ羽衣ぬきかへく
おもとうわつらふ雲乃かけたし
右大弁通俊蔵人（ノトウ）なりとく侍け
れをりとくよろこひいひにほかハ
すとてよめる　周坊内侍
うまして（ヒツイ）ふことハなへてなりぬれハ
いそておゆふりかとうへまゐる
後冷泉院御時蔵人まて侍るを
かゝりなく又乃日大弐二位の

さそあつりおりぬる
鶴鳴九皐（カウニ）詩お注
六位義人叙爵のち
又還昇のもとみある
心まやさしても殿上
おりて侍ハ宜しかる
つきしの勿論まや
世の中かわり
後冷泉院崩して後三
条院乃御代となりて
此五位四年まで白河院
乃御時を當時と云ふ
お義人　六位義人四年
のちいまたに延爵
此時楽　不清あり　三月

はなぬりはらしかる
楊為仲朝臣
さそあつりおりとぬるころハ年まれと（ともイ）
おなし中ぬりこひしかりかる（るべきイ）
同し御時義人まくく侍かる小世中
かわりてお義人にて侍かるを為時
に此時楽乃舞人かりかりへくく
試（シ）楽（カクノ）日よめる　楊俊家　侍従也後紅子　太皇大后宮お進
おりひきや衣乃ふ八千とりまて
みよまくく行をかさすへしとそ

中午日賀茂ハ十一月下
酉日也試楽ハ兼日に
禁中にて所り先音
楽をこゝろむ心也
おりひきや衣乃ふ八
緑（ミドリ）ハ六位乃袍（ウヘキヌ）也義人
をそなれたくさく叙
爵世ぬ歌きなりなよ
まくく行をかさすとハ三代（ミヨ）ハ後冷泉後三条白河院也試楽舞人（ミヨウド）殿河
歌を出すと時呉行を頭にかさすとは江次第十に所り云事根源にも
行臺乃下にて行乃枝をおりくかさしにさすとハ幡此時楽の試楽の所
に所り六位義人ハ四年のち必巡爵に所つかりて緋衣（アカキヌ）をきるとてきる乃
さもあてお義人まくくかく舞人に出んとしひきやさと緑ハ行の縁後
をしらへくけく白菊ハ八重くハ家下乃心なるや清輔朝臣昆才ハ四位より
ゑくく我ハ座く四位にそれらく叙位の時中文に「やべく乃人ふ」のなる

世乃中をうしらすくことわねて
侍かるころハ重菊をしらくよみ
そてわかる　前大納言公任
をしらへくけくしらきくハ八重くの
花乃志もとうしてわかりぬる（ちるイ）

位山をぬる男ありハ若しかりけりとよめるは袋若子をたのみやつく乃
花乃雲とハ下をひかけて男花流めるまをうへてよめるなるや

年比志川みぬくよろ川をしひ歎き
待ゐるころ　菅原兼綱朝臣

まりこと乃あるとや人乃おもふらん
こころのあらしてあらふる男を
きらかゝある人乃志つみさるよしひ
をこせて待ゐる西ゝにつかり
ゐる　菅原元真

まりこと乃あるとや
かく世を流えてハ死ぬ
もせまりしきに花人ハ
待るまりかくあらふる
とやしりん所を待とに
れこもなき物をとも
きみをこふうへてし
我こうハ流め上下を
こま果進させまかし
しさとしたるハ所さ
らかなるや

きみをこふうへてしかくなりけり

我のみとおもひしかも
世まきりひかくてあり
らふるハ我のみとしに
言物の松も年ふる事
もかくてまさ立てを
とし古今著聞云揚
麿へ下ゐるに言物
まて各言物ゐるに
義定ゐ此言を人に感
あり良暹を示に
をゐるり女牛に服突（ツカ）
れぬるゆゑと云り　袋双紙（ニモアリ）
世乃中をいまハかきり
世をしかきりて遁
世乃男ともなんと

志川むなかりしをしら流あるやと
男乃いつこに成果ぬるまをしひ歎
きつゝをもまふしひくかひ待ゐるに
言物の松をえて　菅原義定（織部法定通子　大皇太后宮侍長）

我のみとおもひしかもしらしこ乃
おのへ乃松をしまさかりけり
世乃中をうしみゐる比恵家法師ら
拝よをしゐる　平兼盛

世乃中をいまハかきりとおもふりハ
きみこひしくやあらんとすらん

[illegible]寛仁元年八月九日東宮を辞したく小一条院ニ申しけるを業忠朝臣十三にて雲ゐまでたちのぼる天子にしたがふ世をふべき隆男乃おもひのあるまゝ心を燃りなるへてしひのあるとよみ[illegible]火燒屋をこそ[illegible]

松風ハいろやそとりに[illegible]

世の中をおもひしれ

読侍ける　播河ノ女御（左大臣[illegible]女　小一条院女御）

雲ゐまでたちのぼるへき燃りと見てしおもひ乃かゝりにしたがふ

同院　高松女御（[illegible]堂殿所女母高松上高明公女）[illegible]

心すこく吹ける[illegible]

松風ハいろやそとりに吹[illegible]

[illegible]

世乃中をおもひしれてつくと

心ハ明し風情さひしく氣なる[illegible]

[illegible]

[illegible]

ことありて情慶へ

長徳四年四月廿四日隆家[illegible]

[illegible]五[illegible]伊周公ハ[illegible]

隆家ハ出家とこう侍[illegible]

世乃中[illegible]

[illegible]

[illegible]

世中心[illegible]

詠てよみ侍ける　菅原為任朝臣（左大将[illegible]子）

[illegible]

[illegible]

ことあるとく情慶へ[illegible]

[illegible]

中納言隆家（中関白公隆子）

世乃中のうきにおひたるあやめ草

[illegible]

是よりて端午の菜
むしを稚にかくるすの孫に
かゝる事をかくるなし
又ひとてもあやめ
綾取(アヤメ)文取八雲物云抄
あやめと書さしと服を
乃熊備に指乃音書乃
わらもまで見ぬ法写ハ
葉おほう行きへさゝらく
書をやかくらんと引
よしもあやれ縄
さつきやみこゝの
こゝねの森 八雲御抄 伊豆
或書ニ云子半ニ三子と云る
心のやみを五月闇と云

五月五日服をかくる人乃をそきよ
はかりける　小弁

又ひとてもあやめとられぬましまは
ひきもくてるねをやかくらん

前讃岐守兼房子
静範法師 八幡の宮にまうでて
伊豆乃國へまかりけるに五の
月り内乃大武三位乃もとに流ろさ
しける

藤原兼房朝臣
中納言兼隆子 讃岐守

さつきやみこゝねのもり乃ほとゝきす
人志れすのみなきわたるかな

まりにきつきし
かゝきすうこぬの
咲明し

大貳三位

返し
ほとゝきすこゝねの森になく聲は
きくよその人乃袖もぬれけり

これをきこしめしてめて人そ
へきうしおほせつかされけるを
きてよめる　素意法師
紀伊守重経法名

すへらきもあら人神もなこむなり
あまきるる森乃かけにきすゐる

すへらきもあら人神も
なこむハ和乃字也
彼五月闇乃歌を
感じて雨も頭詠ニ
さゝへ恵を詠る神
もなこむなりけり
あら乃人の御なり
人の神也と感鬼ニ
神ヲ和スル人倫ヲ二とを

丹後乃國にまかりて保昌朝臣に侍りける
すねせんといひける夜鹿乃
式部丈

さとよめり
こころわやいかにそくら
あすは持まて待かれ
いてもこころわやと
わかれきみよらく
史乃保昌持をやめ
ゐにとき

西宮乃家　捨拔云家
北朱雀西高明御子
家ニ但馬守ニ有ハ
岸うつ波とも云ツクルく
海るこそは樓にて
乃西宮なりや
松風もきこうはも
心得し

明を暗て請る　和泉式部

こころわやいかにそてはしらのあかのさかん
今宵はかかるいのちと思へとも
あまたのおかいようちきみはく
しみゆかりてのち待たるあまた
乃家をともありきくよみ侍ち
たる

恵慶法師

松風もきしうつ浪もうちとけて
むかしのはつねを乃すみれ
二条前太政大臣日比能ひ

とこかくのちに　鶉鶏
寧食乃まよし
あねそうちあけまし
わて
まいりてとゐさりと
いかりせきさまて
也式部子大二条殿
小式部内侍をおなすれ
乃るのりよしこゆ
おおそらの風につれての
扉哥し蜘乃いの細
て吹や涼き風より
写乃上句し下るは後の
上ろもし
さひやるわか衣よと

てとこかくのちにあさとをさむ
はるさといひ侍れはよめる

小式部内侍

あねもうちあけまよこそははけきぬる
いまくさふさきすみてはつねを

秋宮女御

野にてしも
おおそらの風につれてものもは乃
こころおもさをおもひやるらん

東三条院　詮子兼家女 後融院后

ゑ

さひやるわかこころもてはさくかの

ちくふ乃くとしねと
いひかけく　とひやる袖
も涙のこゝろ　なるや
世乃中ちかしき比
疫病をとこかて人々
うせかゝる比なるや
なきかなしまおりひなりてや
ゆく世は世といひかけ
てかくなりてある物
をなき人の数に忘ひ
なりてとひなれねと
あるべし
ちるをこそあはれと
ことしは人々なくなれ
梅花や人を忘れぬ

くるしぬとしは面のチラふる
世乃中ちかしき比久しうをとせぬ
人乃をとは流かりしなる
伊勢大輔
なきかなしまおりひなりてやとはさらん
ゆくあるとはけ乃月まいるものを
世の中はかなかりけるこゝろ梅花を
見てくよめる　小大君
ちるをこそあはれと見しか梅のむ
しんけ
ものやことしは人を忘のそん

となり
おりひなりて　京より乃
女を忘し

京よりくしてくはなる女をはらしは
まりかたてのちこと女は忘ひ付てなひ
いてしとなりにかわ女なりなくて
京りのあるへきすへもなく侍なるか
とふ炊ゆるまでて忘るんとしなるわ
おとこ乃をとふいひはかりしなる
よみ人忘るを

とへりしないく世も侍し
いく世もえなりしかり
き霧の男をとへり
とふこゝの女は忘り
かけとしむるまやや
とも霧は女はかる

とへりしないく世も侍し霧乃男を
忘りしもことのあはれやかくると
或人云この女経衡（ツネヒラ）筑おなりて

掛なれハ

掛をのみおもひ様
浅茅ヶ原ハ露をも掛
なれハ露の世ハ如と
いへんさめゆや万葉十二
秋ハ紅ハ色白露り
我者乃浅茅ヶ原ハ
色付ニけりなとよめり

侍ける侍(ハヤ)にまかりかくれ申ける
人乃めになんなくなるかくて世をも
なりはなれハ経衡(ツネヒラ)ほにやつけく
心うかりけることのふ乃心なりとて
男をひの和せて遣にけり
世乃中はねなく侍ける心ろよめる

和泉式部

掛をのみおもひしかとにたりなくて
あさちかすゑり世ハなりはなり
思ふへきへをなき身ハあるおりに

思ふへきへをなき身ハ
わりなき絵に衣と云
思ふへきへもなき身を
只生てある折に衣く
といひをかんとて我なり
て衣とは人もなき身ハ
誰に衣なるものなれハ
かくよめるなるも
いりなれハおもひ色にて
五葉ハ目にとあれども
洞も紅なり目にて
まゝすこなるとて
洞乃こゑれやをきす
といへんとてかくよめり
法子よりもたりなき此の

あはれくといひやをりまし
おもふ車侍りける比をみちをる
まさりあしくよみ侍ける
いりなれハおもしいろまておつれとも
あそるハめりもとあらさるん
世中法をかく侍ける比夕くれり
中納言定頼りとゝり法りけれる

橘川大夫臣

法ねよりをたりなきこころ乃夕蓄に
なくなる人をかりへてきたる

心ハ明し

草乃ゆかりをとりぬ
心ハ明し古今「殘」をとを
あらはる物としひたん
我君も草をとりぬを
りわを此詞を用ても
きしも何へをいりなき
上る毎のいりなきすを
とよみて席府しを
やすしやと寝れと成
とも寄つれようとし
世乃なりをいふことへん
万葉二所詠詩誓ハ世中
をいふことへん鈴朗こ
きいれ毎の詠なきの

西し　中納言宣勅

草乃ゆかりをとりぬ　いりの霧乃月を
いつそれかすよいしんとすしん
世中常なく侍る此人を言ふ世ぬ人
の詩をきしなる　赤染衛門
きしも何へをいりなき　比ヲ　鈴乃霧いりの
あるやなしやと人乃とへり
世乃なりをいふことへんといふ
ことをかけよをきてくいふ詩
侍るなり　源順

ごとくよみ詞をくす
首順りよりし内乃言之
應和元年七月に女子を
うしなひ同年八月に男
子をうしなひ居る時の事
の世順家集に何り
世の中をいふことへん
心ハ明し
何けぬなりかもしらふ
法興院京極の東略河
の邊にかく明しくとて
いりなく苦むとしふ
もとしる毎日くの心を
蕭々暗雨打窓聲
白氏文集三上陽白髮

世乃中をいりなきとへん　秋乃田を
かのかりてしすよひ乃つ子津田
中関白乃いけに法興院（ホコヰン）にこゝらして
法興院の内に頼善なとて中関白建立のちなり
何りつきかしまちとり乃なき侍り
なれハ　多松法師　寛和比人
何けぬなりかも乃りしまちとりなく
かもしなりなくくれんとすしん
文集乃蕭々暗雨打窓（ショウ〳〵タルクラキアメウツマトヲ）といふ心を
よめる　大武言遠　従三位兵敏子
こひしくハ夢なりも人をみるへきよ

人乃こゝろ乃一句ハ蕭(ショウ)
こゝろすさまじきをいふ 奥義
こゝろしハうらみも人を
うらみうらむすさひしき
ものなれバ東北なるに
王昭君漢元帝宮人也
まうつさしめて王にかゝ
て幸(サイ)せられて其画
師に賂(まいなひ)せり昭君わが
美色をたのみて賂せず
胡国の王ひとり美人を求
むる時ゑにかゝせて昭君
を胡旅にながさせり委
西京雑記にくはしく
みゆことさらの哀なり

かとうつりかゝりめをさかしけく

王昭君を詠る　赤染衛門

なげきこし道乃露にもまさりけり
なれにしさとをこふるなみだハ

僧都懐寿　山僧也

おもひきやふるき都をたちはなれ
この国人にならんものとは

懐園法師　源為善子　山大宮禅師

みるからにかゞみのかげのつらきかな
かゝらざりせバかゝらましやハ

昭君胡国へゆきたるハも
なしかりやかるきすがたを
見せ人ハ胡国をはなれ
見ることのひかりかの獄乃
えしハ昭君をよめる下句
あらはしかくて美色なるを
いかで絵師のかくれて
胡国へゆかんやとし又胡
姫てまくらをたてゝ
こゝにも来ることなし
かくてもこゝろ（中略）

入道おほきおとゞ法成寺にて
念仏をとなへ侍る比後夜の時に
おはしてちかきところにて侍るよ
しを申させ給へれバよみ侍る

弁乃乳母　山の井乃尼とおなし

いにしへハほのきゝしとりのねれ
うましきさへつきえかなしき

法成寺　拾芥云近衛北京極東　御堂関白寛仁四年建立
後の時よりいへるハ業平朝臣の御臓法乃行ハるゝ
りんさいて後の時のこと月をみてけ頃よりの唄し嬉てこ
いにしへハ法ときこえし業平朝臣尼寺ハりきれハはるかにされこそ

はなや昔ありし人とうちふして物語をもせしふる哀を一夜をとひ
し比ぞ此明しはべりし事ハなみてはべりて袖のなミだの涙にかけ
難波と見ゆむかしつらゆきの今も袖をぬらさんと侍るにつけても昔
のことはりまで悲しきに

さもすれハ人の心景
年比俄行乃身まて
さくすれハ思ふ乃事ハ
に思のうかれてとも出
ことわりにすみよ宗
後よ我身を保せて〳〵
くかゝるすべよしも
まつまふにかゝりき我ハ
世ハとくとく背かれけ

従行よ出さ河月よりも〳〵立返る端の
頼よ去付侍る　増基法師

さもすれハ心も乃山まりおくれし
こころよ身をもまかせはてぬ哉

かくらひ侍る人乃ことよりも世とこ
むきあんとあるもしハりきいひを
せて侍られハ　馬内侍

志りすらにかあきさ乃ハよ我あらめど

ましてこハこ世をとき
入行乃心のさすり
よ悲しくて我え背き
侍りすりし
あさのその身れつる
身ハかよりても心ハ
深く思ひ今ハ山住の
幸よもとく事を
何ハ山身れとく
山よもすこし入ぬき
只心を深きら住
せてなひれとも
まことよおやおもし
我と同し為よ念経
し八講よや我も

うき入行のこころあかれ
山入のすゝて法師よ成侍る人
よ流れりける　藤原長能

あさの身れつるふもとけらん
こころをとさき山のすゑのせよ

我家胡に世を子むきぬときて
律師長厳（東山）　宗経子
てはべりける

まことよおやおもし為よ八念なる
ひとりハ我しゆへしとおもふり

中宮乃内侍尼よ成ぬとやて

独ハ往生もせず君
と同じくとぞいはれしと
いかでかく花の袂を
うらやまんとハ法華
経不覚内衣裏有無價
寶珠乃こころと奥儀
抄にも衆生無明の
酒に酔て我の佛性を
しらざるを佛の哀
みひとしく今内侍花
の袂をぬぎて出家せハ
衣裏の玉を忘れざる
よる心そよめるならむ
かけてふ衣のうらに
こそさとてすまひの

法のうたる　和泉式部

いかでかく花の袂をたちかへて
うらなる玉をわすれざりけん

返し　中宮内侍

かけてだに衣のうらに玉ありと
しらですぎけん方ぞくやしき

万寿三年正月十九日出家法名清浄覚 卅九歳
上東門院あるまじき世をいとへる
比読てよみ侍る　選子内親王 村上皇女 大斎院

まことにすぎけんあまのまつらもねも
ひとりやあまのきやみはすてけん

男女くるしみけるゆゑの
煩ひをとく繋具衣裡
乃経文をうけてよま
れたり字用ゐ
まことにすゞしきの
経佛をも忘れ侍る男
とあはせなる心なるを
なさりもふひやをせ
をも衣裏寶珠乃
心をて伊勢大輔ハなき
かく成順のさとり乃
男を成く夫婦の中
語んとハさるひのうと
こそうひしやなるを
おもふなるもいはぬを

高階成順世をそむきて侍るよ
袖さ乃衣を人乃もとにおくりとて
侍るとて　よみ人しらず

なげくともいひやはせしおさこそも
あその玉乃うるへしとハ

かへし　伊勢大輔 高階成順妻

おもふもいふものゆゑにたちかれや
ころもの中にあるもしる月を

後一条院うせさせ給て世の中 一条院皇子御母上東門院
なげきもしられハ法師となりて

衣乃玉乃あらはれ
日といふも成帆の星の
乃ゑに入る日を見
我恩愛乃給る歟也
前中納言郡基 大納言後賢子
袋草子云入道中納言郡基
ハ後一条院近習の臣也而長
元九年四月十七日院崩御同
廿二日於大原出家年廿七時
人落涙ゝ
世を捨て君を出ふし
於後一条院を生ふ
とき乃ゆも立しき
世ハ二こゝひもうむかさ
らかしとハ續世紀

横河にこゝりぬるく侍る比上
東門院よりとハせまひしけ
ゆきハ
前中納言郡基
世をすてゝやとを出ふし身なれも
なをこひしきハむかしなりけり
御返し
上東門院 後一条院御母
とき乃ゆも立しき事乃歴中のを
世ハふてひもうむかさしかし
世をうむく人をおもひ侍るころ
前大納言公任

年月無云ゝしめハ御
くしうゝ世をひて侍
ゝ皆おもひさ世をふ心なる
へしゝ上東門院第
寿三年四月十九日御
ゆゑをかへるひて法名
清浄覚と申 御案廿九
又長暦三年四月廿日ニ
御くしおもひさ世をふよし
同相続ニ至帝を慈給
御心歴りしき故とし
おもひ出る人もあり
心明し
きみに人なれなるゆゑ
東宮に別をて山中

おもひ出る人もあるとなる世の中を
いつとくすくもあるらん
三条院東宮と申なる時法師にあり
て言乃うちにしてゆゑなる
菅原統理 今一升
きみより人なれなるゆゑおく山より
いりて乃ちハわひしかりけり
御返し
三条院御製
わすらまをこひ出てやま人を
出りうこひしく我もなのむる

まても忘なぬ心なるも
わすれ是をとゝひ出て
志りて無しくハ我も
さのことく綻理を言
詠るとの此心なるも

平人もわすれのこゆく
業花抄云 袋草子云
飯室にて詠るよしこゆ
昔見別し人も忘れの
志くとひとぬ西書
ハ心乗く忘れを同来
て花も咲てまたと
義憶ハ花山院の外戚
寛和二年六月廿三日院
御祝髪習出家

花山院の法師に出家
法師うりなりて住侍る所に
探乃法きてく侍るを見てく
業花抄云 梅とあり
前中納言義憶 ヨシチカ 謙徳公子

平人もわとれのみゆしふるさとに
業花やまさとに
こゝろなりくもきてるすゝかる
世をうむきてく長谷に侍るころ
ナカタニ
入道中将乃ことよりまた住別し
あとゆしなれハ
万葉二年 晋曽出家委
お大納言公任
業花抄云 廿七三

谷風りなれをといくおもふしん

世をうむきてく長谷
公任四万葉二年正月
四月於長谷出家 業
花抄云 廿七に委

こゝろハをやくすみしものを
入道中将のことより
此事人と同誰人ハ
業花抄云 勅抄云 源成信 致平子 茂成房 義懐子
まゝ住なれしかし 同抄云 三井なよりへ道中将のきみの叩しかしかり
なる まゝなれぬことにかれに住うむる谷乃何しにいくしかしん
西しとあめて此哥あり
谷風りなれすと とく心をすゆしてく山居せしあをとも

良暹法師大原に
袋草子云 人々大原
なる所に極行り
各詠する而後報

良暹法師大原にことわねぬ
ときてはかりしなる
素定法師

胡臣の俄に下るを
人々惑く問之答云
此所は良暹の旧房
也いかてか不下馬小
人々感嘆志く皆以
下るなり

チくさぬしおかろ乃
チくさはあ葉生るを
勝法あは小大原まなり而はあ葉居し勝法あられとも良暹
の心より月はすみうりかんとて
おとくてや月も　勝法あすむといふ名はかりとおとくのちは
月もうかひやせんと
は心乃すむとりかるも
ありしとなりや

チくさぬしおかろ乃志あ底ゆく
こころかり月乃かけはうかふや
再し　良暹法師
おとくてや月もうかひん大そらや
おかろ乃法あすむ名をかりて
良暹法師乃をとりほかるし
なる　菅原國房

おもひやる心さへこそ
心は明之

おもひやる心さへこそ浅ひしなれ
大原やまれ秋乃ゆふくれ
をとうとなりなる法師乃山こも
里しく結なるをとなりかくて
あんなりとぐまぐきといひて
結なる西ちに法かりしける
律師朝範

なりとしまりき
元信をつまりきとし

おもひはすに入とそ
えとしまりき物乃
ふかふ山に入とはあれて
神めなりなりまきは
とけてしまりは通れ
ほるも誰しめうや

おもひはすに入とはあてきなりつさう
かくしは通き人乃しめうそ
長兼寺りすみ結なるこゝろ